

社会環境の変化、学問の一層の高度化・専門化をうけ、現在日本の多くの大学で大学改革が進行中だが、京都大学においても、様々な形の研究教育体制の改編が行われはじめた。

まず、長く検討されていた教養部改革は、1991年の京大最初の学部をもたない独立研究科としての大学院人間・環境学研究科と、翌年の総合人間学部の設置となって実現した。同時に、教養課程と専門課程の区分が廃止され、高度な一般教育を目的とした全学共通科目が設定されて、学生が4年(医学部は6年)一貫教育を受けることが可能になった。

一方、高度な専門能力・研究能力を有する人材の養成を目的として大学院改革が進められ、1992年の法学部を皮切りとした大学院重点化は、1997年現在、大半の学部で実現するに至った。また、新たな独立研究科設置計画に基づき1996年エネルギー科学研究科が設置されている。

このほか、部局の新設・改組としては、1994年に大学教育のあり方を研究する高等教育教授システム開発センターが設置され、1996年にはエネルギー問題に関する先端的科学技術研究を目的に、エネルギー理工学研究所などの改組により設置された。さらに1997年には総合博物館と総合情報メディアセンター(情報処理教育センター等から転換)が設置されている。



総合人間学部門標。(6-1)

討論集会「京都大学の教育を考える(第一回)―全学共通科目をめぐる―」の様子。1996年8月、井村裕夫総長はじめ教職員など約200人が参加して、教養教育のあり方について意見交換を行った。(6-2)



全学共通科目の電子掲示板を見る学生たち。(6-3)



「第1回大学教育改革フォーラム 日本の大学教育をどうするか」の様子。1995年3月、高等教育教授システム開発センターの主催で行われた。(6-4)

大学院重点化・独立研究科・新部局



医学部正門と二つの門標。大学院重点化によって新たに「大学院医学研究科」がつけ加えられた。(6-5)



大学院エネルギー科学研究科創設・エネルギー理工学研究所改組合同記念式典。(6-6)

人間・環境学研究科棟。1996年に竣工した。(6-7)



自己点検・評価

自由の学風を検証する



京都大学自己点検・評価報告書
1994

『自由の学風を検証する一京都大学自己点検・評価報告書一』。1994年6月刊行。京大が自らの理念、教育研究の現状、将来構想等について全学的に点検・評価を行ったもの。このほか各部局単位でも自己点検・評価報告書が相次いで刊行されている。(6-8)

近年のコンピュータと情報通信ネットワーク技術の飛躍的发展・普及を背景として、京大においても急速に情報化が進んできた。1991年に第1期計画を完了させた京都大学統合情報通信システム(KUINS)は、1996年に第2期計画として超高速のKUINSII/ATMを整備した。また、1997年には、新たに衛星通信大学間ネットワーク(SCS)の運用も開始された。それにより、画像・音声・動画像などマルチメディアデータベースの作成提供が進み、遠隔講義システムの導入などが実現している。さらに現在、総合情報メディアセンター、総合博物館、附属図書館などで新たな構想が展開しつつあり、大型計算機センターなど既存の組織との連携を強化しながら、京大の高度情報化が進められている。

京大における国際交流に関しては、1990年代には引き続き量的拡大がみられた。京大と大学間学術交流協定を締結する大学は15カ国28大学および1大学群となり、受け入れている外国人研究者や留学生数も表のように増加している。また、1997年10月からは、学生交流協定のある諸外国の大学からの短期留学生を受け入れ、英語で教育を行う京都大学国際教育プログラム(KUINEP)が開始される。これは日本人在学生も受講でき、新しい試みとして注目される。

このほか社会人教育、民間との研究協力、広報活動など、「開かれた大学」を目指す動きは現在非常に活発である。



KUINSの完成記念披露式典(1990年)。(6-9)



SCSの運用開始記念式典(1996年)。(6-10)



ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー(VBL)棟(右)。1997年に竣工した。学内だけでなく、海外研究機関、他大学、企業・官研究所との共同研究を行い、新産業、ベンチャー・ビジネスの創出を目指す。(6-11)

国際交流



大学病院衛星医療情報ネットワーク(MINCS-UH)開局記念式典(1996年)。大学病院間での高次医療情報の交換を行い、診療機能の高度化を図ることを目的として設置された。(6-12)



留学生国際シンポジウム(1994年10月)。京都で留学生生活を送る意義や帰国後の活動における留学の有用性などについて講演・討論が行われた。(6-16)



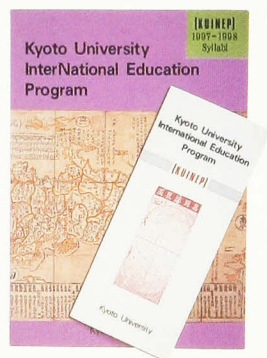
総合情報メディアセンター銘標設置式。(6-13)



留学生センターにおける日本語予備教育の風景。大学院への留学生を対象に、研究活動に入る前段階の約半年間日本語教育を行っている。1992年度に開始された。(6-17)



京都大学のホームページ。(6-14)



KUINEPの概要とパンフレット。(6-18)

大学間学術交流に関する一般的書。(6-19)



東大路通沿いの病院構内。再開発によって塀を低くし、植栽帯が設けられた。開かれた大学への転換の試みの一つといえる。(6-15)

年度	外国人研究者	留学生
1990	472	764
1991	566	770
1992	562	808
1993	615	895
1994	587	892
1995	662	921
1996	712	968

近年京大で受け入れている外国人研究者数および留学生数の変遷。(6-20)

1997年現在のキャンパス(時計台屋上から)

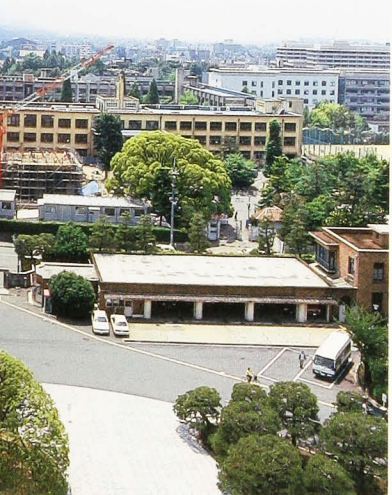
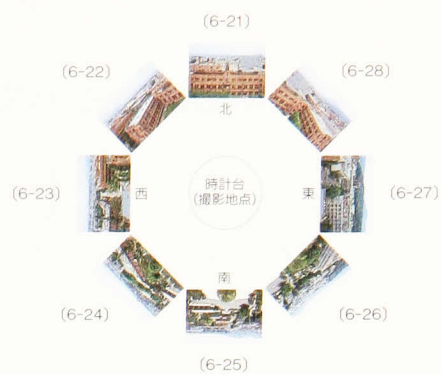
時計台から見た八方位の眺望(1997年6月現在)。136頁掲載の1925年頃の撮影のものと比べてほしい。ほぼ同アングルでの撮影ということは周囲の山の稜線からわかるが、約70年間のキャンパスの変貌ぶりには改めて驚かされる。



キャンパスの現状

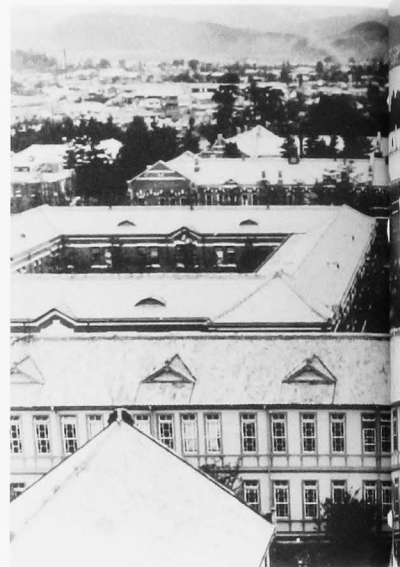
© 1997

右図は本項の写真の位置関係を時計台を中心として再現したものである。

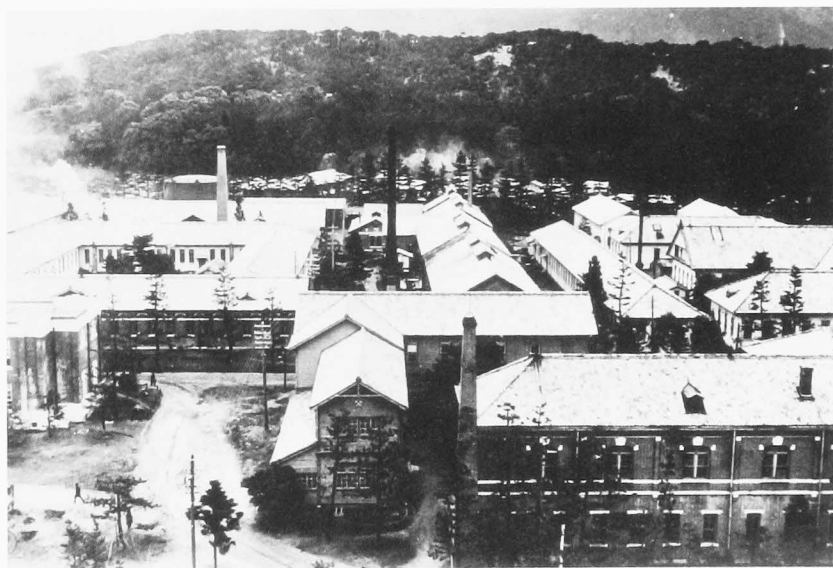
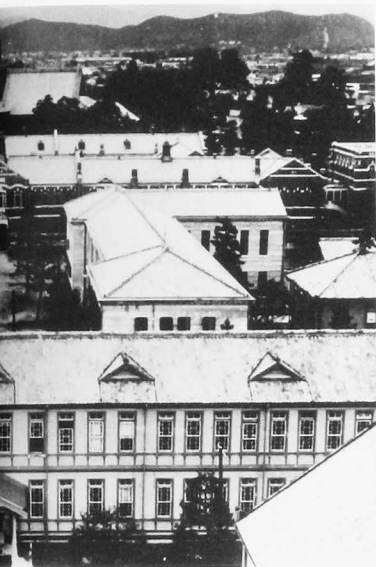
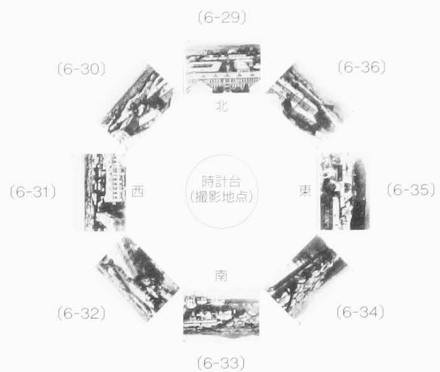


1925年頃のキャンパス(時計台屋上から)

時計台から見た八方位の眺望。時計台竣工後間もなくの撮影と思われる(1925年ごろ)。南西方向の現学生部等の建物付近が、今でも当時の様子を最もよくとどめている。ほかにも現存する建物がいくつか写っているが、それらは前頁の1997年現在の写真では、周囲の建物に阻まれて時計台からは見えなくなっている。



右図は本項の写真の位置関係を時計台を中心として再現したものである。



各キャンパスの姿〈1〉

創立百周年にあたる1997年現在の京大キャンパス。各構内では再開発計画が進行中で、建物の新築が相次いでいる。こうした変わり行くキャンパスの姿に焦点をあて、典型的な風景や新築の建物を構内ごとにまとめてみた。

本部構内の現状

時計台を囲む各時代の建築。手前から創立期の煉瓦造り建築である学生部、戦前期の時計台、高度成長期の工学部6号館、現在の工学部物理系新校舎。人文研本館屋上より撮影。(6-37)



文学部校舎と法学部経済学部校舎間に設けられた広場の空間。左から文学部新校舎、文学部旧本館、法経本館。(6-38)



工学部物理系新校舎(左)とベンチャー・ビジネス・ラボラトリー棟。建物の高さ制限の緩和により8階建ての高層建築が可能となった。(6-39)



北部構内の現状



北部構内の眺望。理学部化学教室・生物物理学教室棟屋上より北西をのぞむ。(6-40)



理学部動物・植物学教室研究棟前の構内道路。今後この道路沿いに理学部新校舎群が建設される予定。(6-41)



農学部総合館(左)と数理解析研究所(右)にはさまれた構内道路。(6-42)



基礎物理学研究所新研究棟。1990年に広島大学理論物理学研究所と統合し拡大再編成された。(6-43)

総合人間学部構内の現状

総合人間学部構内遠景。病院構内からの眺望。左側の新しい建物は人間・環境学研究科棟。(6-44)



各キャンパスの姿〈2〉

病院構内の現状



医学部附属病院内科系臨床研究棟。右下に見えるパラボラアンテナは大学病院衛星医療情報ネットワーク用のもの。(6-45)



分子生物学実験研究棟と生体医療工学研究センター実験研究棟(右奥)。先端分野の研究棟が建ち並ぶ。(6-46)



東南アジア研究センター・アフリカ地域研究資料センター共同研究棟。右に見えるのは東南アジア研究センターとして使用されている旧京都織物会社本館。(6-47)

医学部構内の現状



医学部構内全景。南側の病院構内からの眺望。左下の医学部正門から一直線にのびている構内道路は創立期からの特徴的風景。(6-48)



宇治構内の現状



木質科学研究所木質材料実験棟。国立大学では戦後初の木造による研究実験棟。(6-51)



防災研究所地震予知研究センター。(6-52)



宇治地区研究所本館。自然科学系の5研究所・1センターが入る共同棟。屋上から中庭のグリーンベルトを見下ろす。(6-53)



宇治構内前庭。宇治地区研究所本館屋上より見下ろす。(6-54)



医学部構内のセンター群。東大路通沿いに見られる風景。右から放射性同位元素総合センター本館、同教育訓練棟、放射線生物研究センター。(6-49)



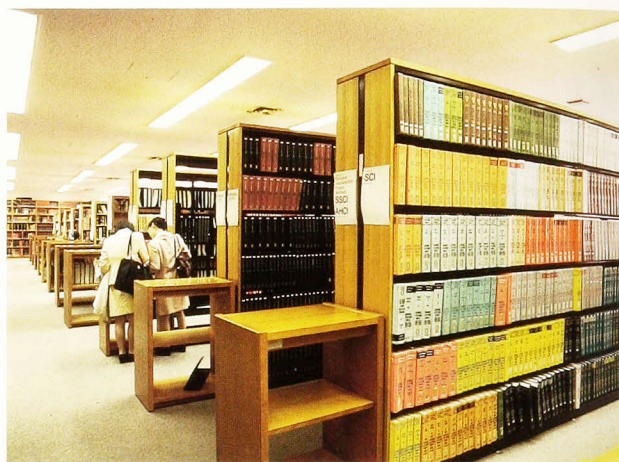
医学部基礎校舎群。医学部構内の建物は近年の建て替えでこのようなレンガ色に統一されてきている。なお、左奥は附属病院内科系病棟。(6-50)

図書館

京大図書館は附属図書館を中心として各学部・研究所・センター等の約60の図書館(室)からなり、相互に協力し、研究教育を支援している。現在蔵書数は547万冊に達し、国内有数の大学図書館になっている。近年は、図書目録のデータベース化をはじめ、ネットワーク対応のCD-ROMの運用、貴重資料の電子化によるインターネット公開など、電子図書館としての機能強化にも力を入れている。



附属図書館2階開架閲覧席。(6-55)



附属図書館開架書架。(6-56)



附属図書館地下の貴重書庫。24時間連続の空調設備をもち、壁面は木板の落し込み構造になっていて、結露、湿度変化には万全の対応をとっている。(6-57)



附属図書館インターネット端末。(6-58)

附属図書館銘板。(6-60)



附属図書館エントランス・ホール。(6-59)





数理解析研究所図書室。(6-61)



総合人間学部図書館。(6-62)



文学部図書室。1996年に新築された。(6-63)

舎密局～三高資料室。総合人間学部図書館内にあり前身校時代の文書類を収めている。1996年に2年かかりの整理保存作業が終了した。(6-64)



創立期の京大関係の個人史料。大学史関係の貴重な史料が学内には多数ある。(6-65)



附属図書館所蔵「鈴鹿本 今昔物語集」(鈴鹿紀氏寄贈)。1996年5月に国宝に指定された。(6-66)

総合博物館

京大には、文化史、自然史、技術史の各分野にわたって収集・研究された250万点に及ぶ学術標本資料が保存されている。このうち文化史（歴史学・地理学・考古学・美学）関係の資料については、1914年竣工の文学部陳列館、1986年に新築された文学部博物館において研究・公開が行われてきた。その後自然史、技術史関係の資料についても保全・活用の方法が検討され、1997年に上記三つの分野の資料の保存・管理・活用・公開を目的とした総合博物館が新設された。



第1総合展示室(考古資料)。(6-67)



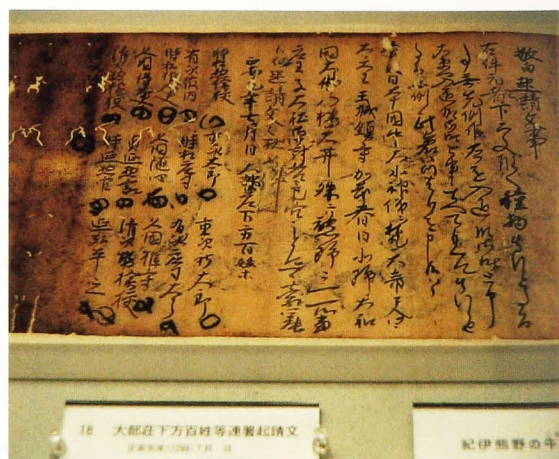
地理民族資料研究展示室。(6-68)



石棺展示室。(6-69)



考古資料収蔵室。(6-70)



大郎莊下方(おおべのしょうしもかた)百姓等連署起請文。1996年秋季企画展において。(6-71)



総合博物館銘標。(6-72)



理学ミニ博物館。自然科学関係の標本・資料類や研究の現状を紹介する施設。理学研究科によって1995年に理学1号館5階に開設された。(6-73)



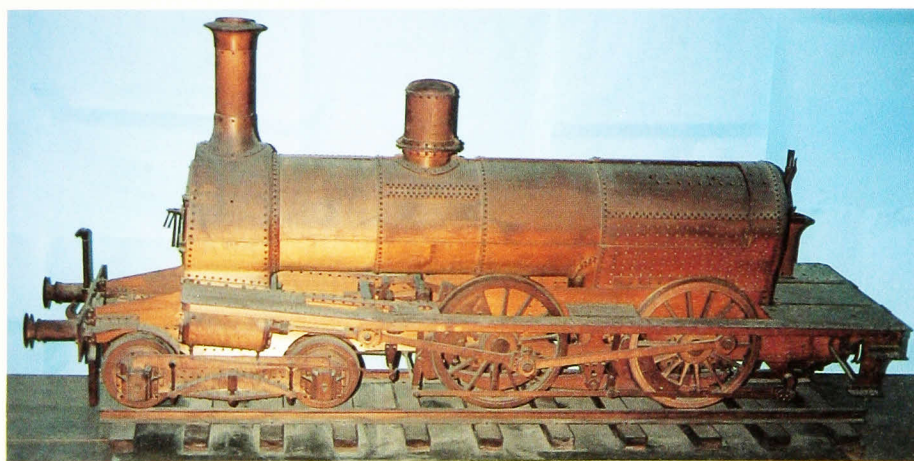
ヨロイメバルの標本。故松原喜代松理学部教授が新種として記載命名した種。(6-74)



ボルオネ産ヤモリの正基準標本。京大のフィールド調査によってボルオネ島で初めて発見されたLuperosaurusのヤモリ。(6-75)



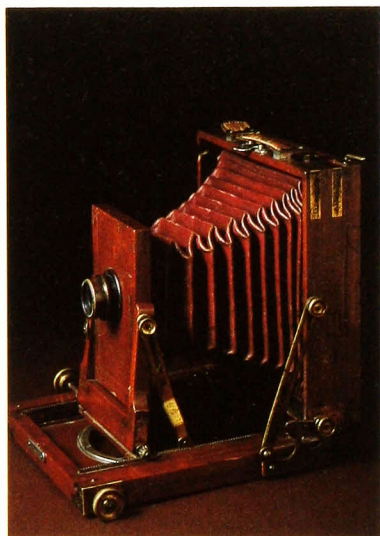
ニホンカモシカの全身剥製標本。西日本での生息は限られているが、これは京都市内で発見されたもの。(6-76)



木製蒸気機関車模型(1890年代製造、長さ2200ミリ、幅1000ミリ、高さ660ミリ)。教育用模型で、機関車の構造を理解させるために用いられたと思われる。1898年には理工科大学機械工学科で「機関車」という科目名の講義が開始されている。(6-77)

旧三高物理実験器具

総合人間学部には、第三高等学校から引き継いだ、前身校時代以来の物理実験機器が数多く保存されている。合計点数は500点を超え、最も古い機器は1881年よりも前に購入されており、近代日本科学史上屈指のコレクションといえる。なかには大変な高額で購入された機器もあり、近代日本における実物教育の重視も物語っている。この一部は戦後の教養部でも教育に使われていた。



カメラ(230×235×240、単位はミリ、以下同、1898年購入)。(6-78)



トムソン象限電位計(307×270×370、1897年購入)。(6-79)



トランシット(高さ355、1895年購入)。(6-80)



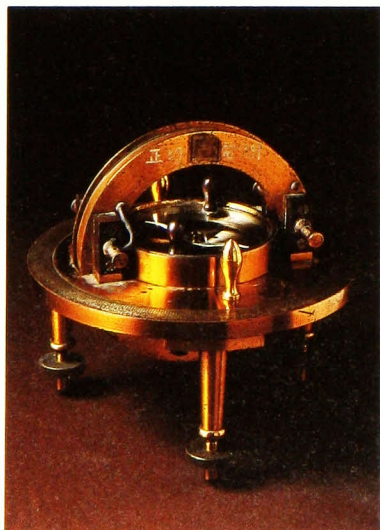
ウイムズハースト静電高圧発生装置(302×210×410、1908年購入)。(6-81)



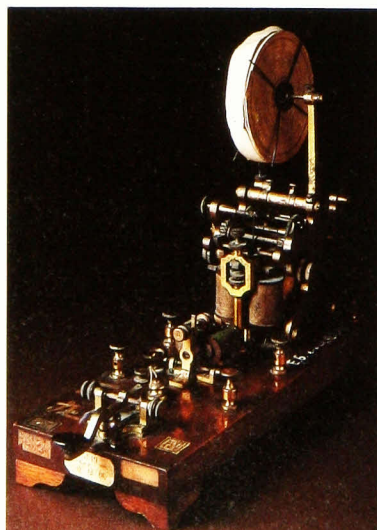
ダニエル湿度計(高さ270、1891年購入)。(6-82)



顕微鏡(153×84×250、1883年購入)。(6-83)



正切電流計(高さ212、1901年購入)。(6-84)



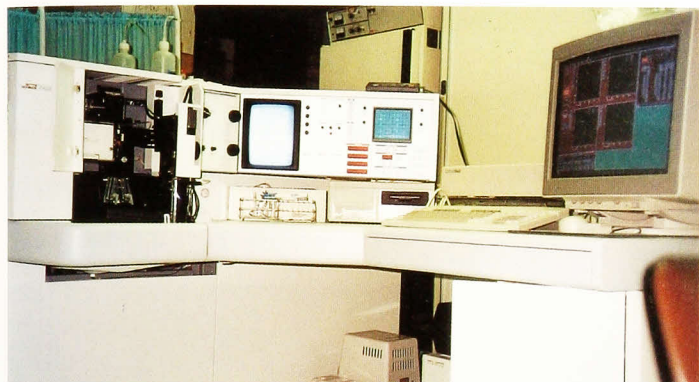
モーリス電信機(381×153×330、1884年購入)。(6-85)



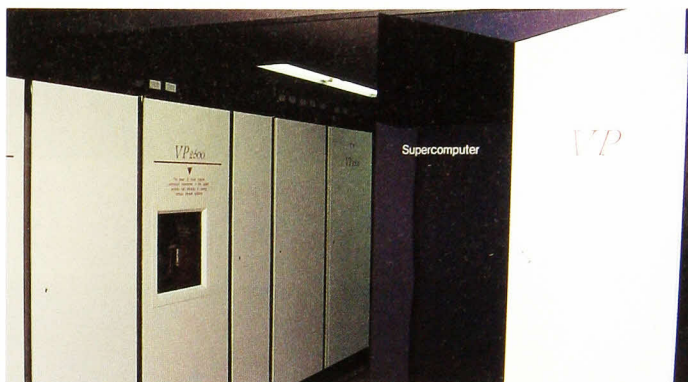
天体望遠鏡(高さ1170、1887年以前に購入)。購入価格は400円。ちなみに1880年開講の大阪中学校の授業料は年2円だった。(6-86)

近年の研究実験機器

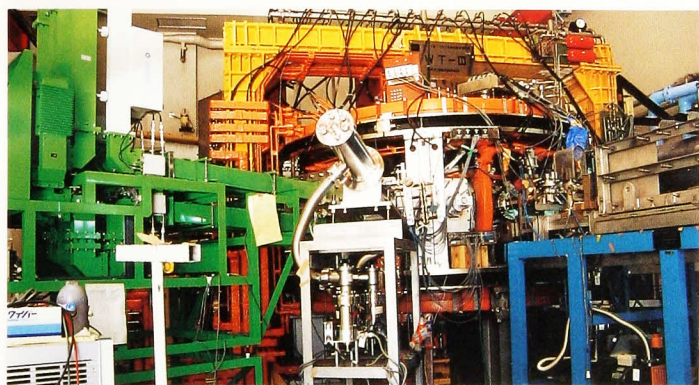
近年の理工系を中心とした学術研究の高度化に対応して、研究実験に用いられる機器は全体的に大型化、精密化している。総合大学として多くの分野の研究が行われている京大では、とりわけ多種多様な機器が使用されているが、ここではそのほんの一部を紹介する。



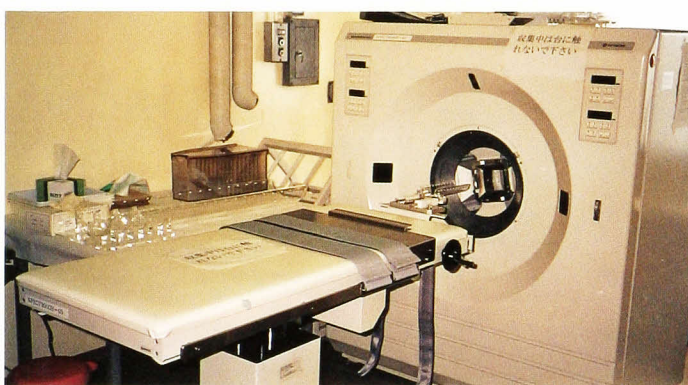
胸部疾患研究所の自動細胞解析分離装置。(6-87)



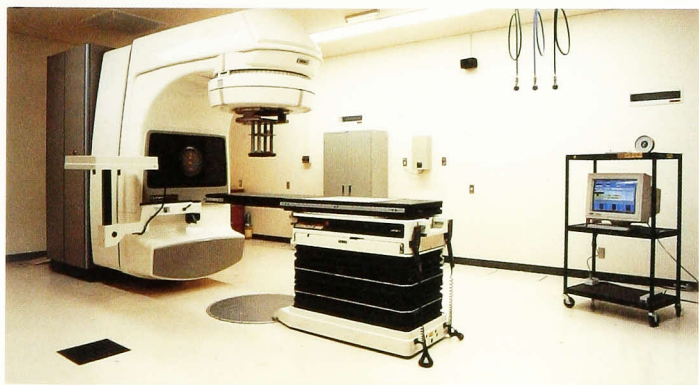
大型計算機センターのスーパーコンピュータ。(6-88)



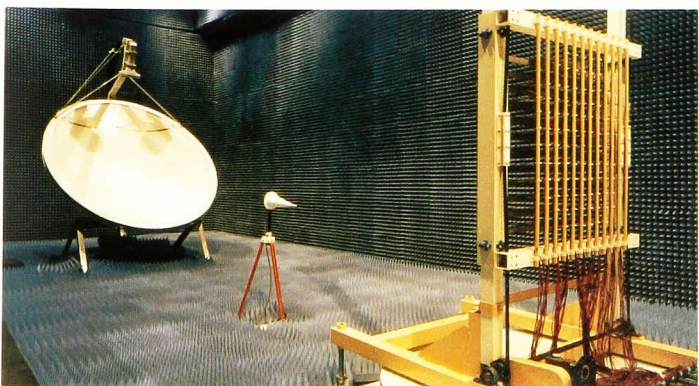
理学研究科のトーラス型プラズマ実験装置。(6-89)



薬学部動物用SPECT装置。(6-90)



医学部附属病院のリニアック照射室。(6-91)



超高層電波研究センターのマイクロ波エネルギー伝送実験装置。(6-92)



理学部附属飛騨天文台のドームレス太陽望遠鏡。(6-93)

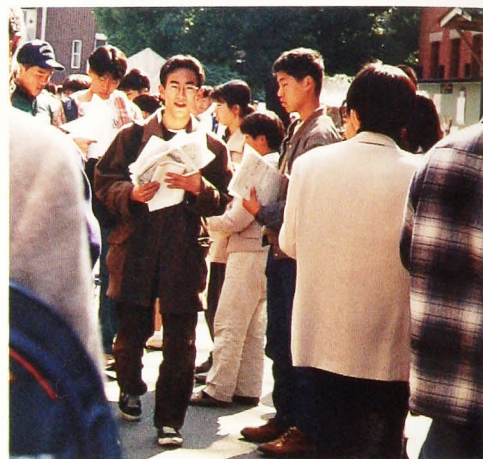
キャンパス歳時記



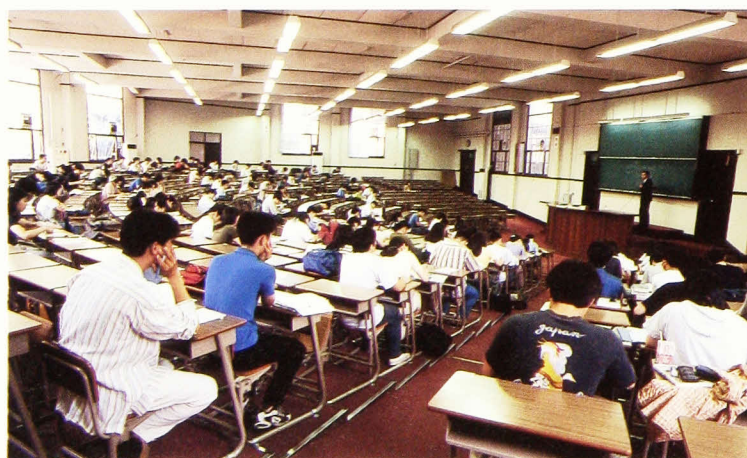
早春の時計台。(6-94)



新入生へのクラブ勧誘風景。(6-95)



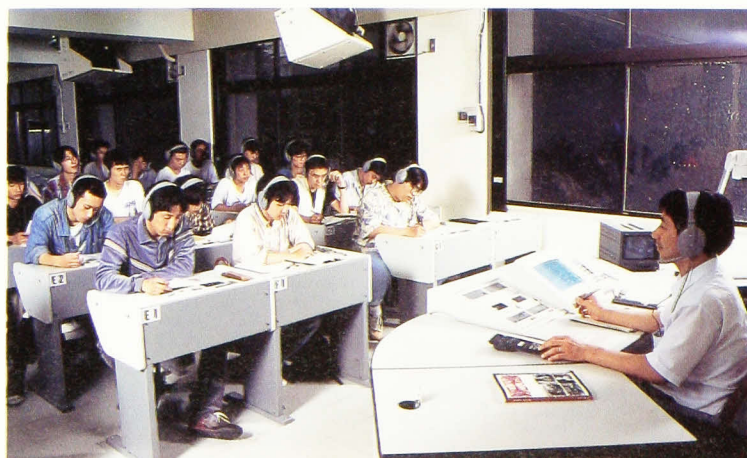
勧誘ピラを山ほど渡される新入生。クラブの入会案内などが次々と。(6-96)



大教室での授業風景。時計台1階の法経第1教室にて。(6-97)



桜と新入生。入学式終了後の東大路通。関西日仏学館前。(6-98)



LL授業風景。総合人間学部。(6-99)



情報処理演習の様子。総合人間学部。(6-100)



ヨット部のレース風景。(6-101)

初夏の宇治橋内。(6-103)

混雑する構内。時計台北側の生協購買部入口付近。(6-102)



昼食時に混雑する中央食堂。工学部8号館地下。(6-104)



医療技術短期大学の臨床血液学実習。(6-105)



農学部附属農場での田植え実習。(6-106)



農学部の夏季臨海実習。(6-107)



吉田グラウンド。野球の練習風景。(6-108)



大文字の送り火と時計台。(6-109)

京都大学交響楽団の定期演奏会(1995年6月、第157回)。(6-110)



総合体育館での運動部の練習風景。(6-111)



農学部グラウンド。アメリカンフットボール部の練習風景。(6-112)



総合体育館附属プール。水球の練習風景。(6-113)



生協書籍部。1994年に西部食堂1階に拡張移転した。(6-114)



黄葉する銀杏並木。総合体育館前。(6-115)

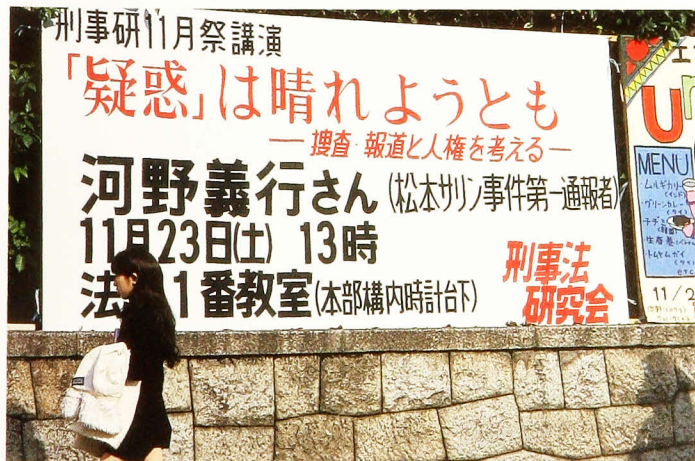
11月祭の総合人間学部構内正門。(6-116)



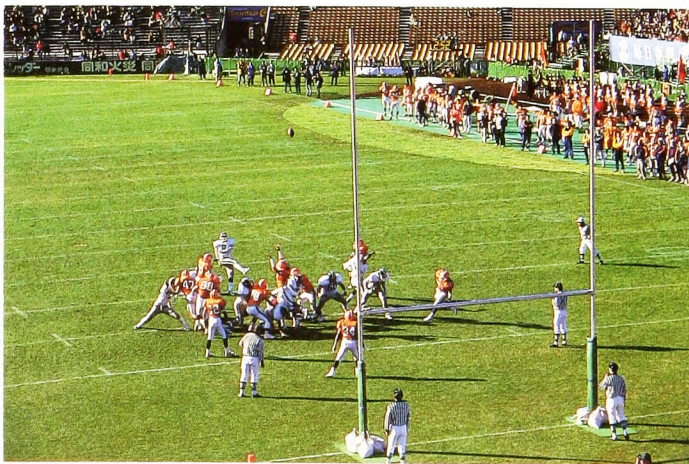
1996年の11月祭前夜祭におけるファイアストーム。吉田グラウンドにて。(6-117)



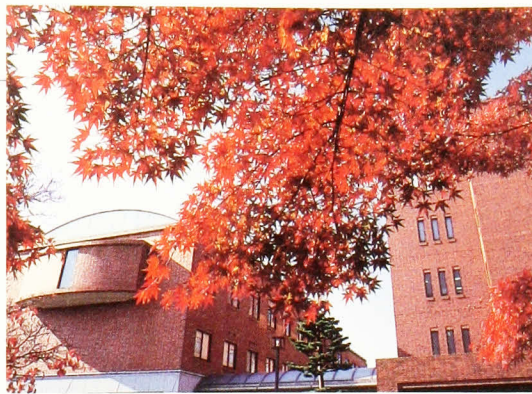
留学生による11月祭の出店。(6-118)



11月祭の催しの立て看板。(6-119)



アメリカンフットボールの試合風景。1996年甲子園ボウル。(6-120)

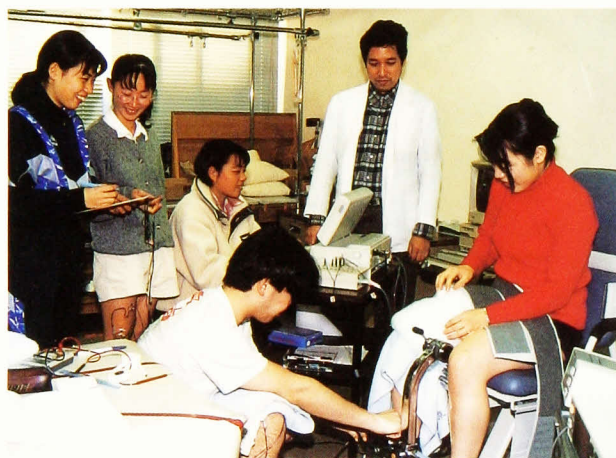


医学部構内の紅葉。(6-121)



黄葉する北部構内の銀杏並木。(6-122)

農学部附属農場での取り入れ作業。(6-123)



医療技術短期大学の物理療法実習。(6-124)



総合人間学部で実施されている全学共通科目の授業。(6-125)



総合人間学部での演習。(6-126)



総合博物館での考古学実習風景。(6-127)



雪景色の法学部経済学部本館と中庭。(6-128)



節分祭でにぎわう吉田神社鳥居前。(6-129)



入学試験当日の東一条通。激励の立て看板が並ぶ。(6-130)



合格発表の瞬間。(6-131)



1995年度卒業式。総合体育館にて。壇上は井村裕夫総長。(6-132)

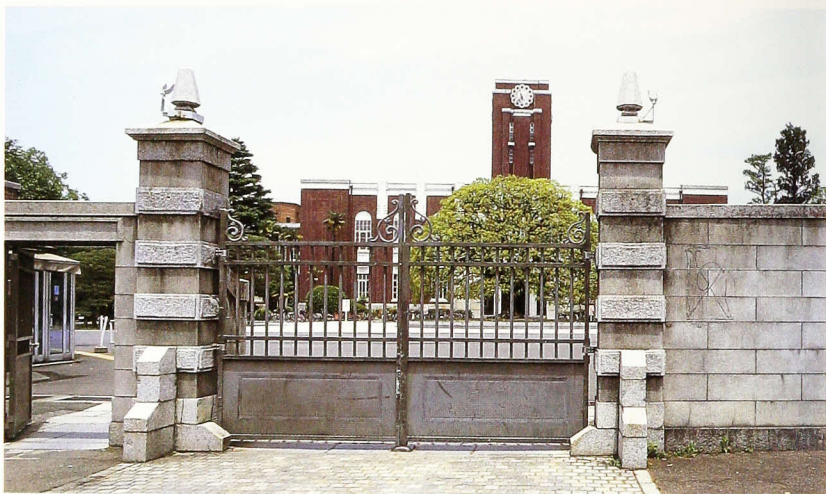
歴史的建築物

第三高等中学校以来の長い歴史を持つ京大キャンパスには、個性的な建築物が数多く建てられてきた。ここでは、現存している戦前期の主な建築物をまとめて紹介する(註1)。時期区分と建築様式の変遷の特徴を以下簡単に述べてみよう。

第三高等中学校の施設が吉田の地に姿を現した1889年、洋風建築のつくられ方は、技術面においては赤煉瓦を積むか、木造ペンキ塗にするかであり、造形面では、歴史的な様式の規範が絶対であった。材料も職人も資金も不足がちなかなか、草創期の人々は質朴で暖かい施設を残した。理工科大学の分離など拡充が開始された1914年には、鉄筋コンクリート構造が姿を現し、またアール・ヌーヴォーやセセッションなど19世紀末に現れた新造形が日本にも大きな影響を与えていた。時計台はこの傾向の集大成である。キャンパスの骨格が成立した1920年代後半には、煉瓦造りはもはや過去のものであった。デザインにおいては、歴史様式に対する習熟が進む一方で、その規範から離れた自由な発想を求める風潮が強まる。過去の美への挽歌と、現代へ直接つながるモダニズムとが交差する時代であった。京大キャンパスに累層する建築群は、そのまま近代日本の建築文化の歩みを物語るのである。

第三高等中学校京都移転期

旧第三高等中学校物理学実験場(1889年竣工、山口半六・久留正道設計)。
現在は留学生センターが使用している。(6-133)



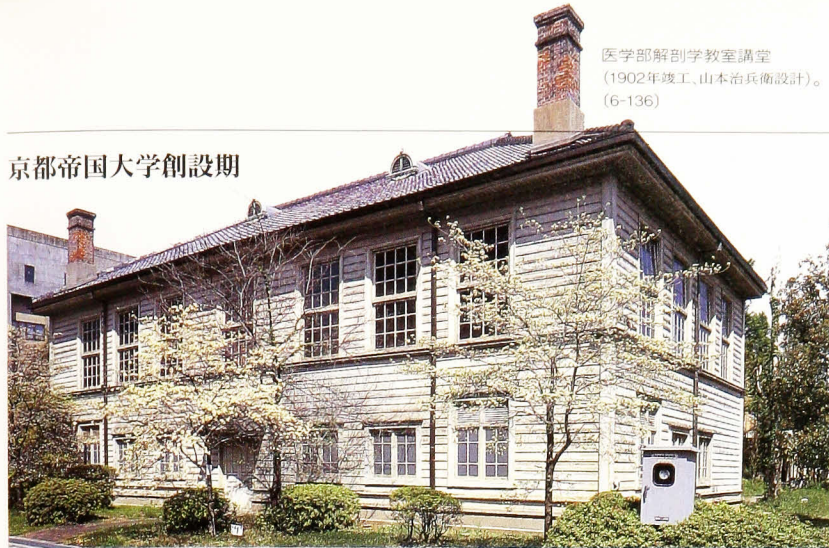
本部正門(1893年竣工、山口半六・久留正道設計)。(6-134)

京都帝国大学創設期



旧第三高等学校正門および門衛所(1897年竣工、真水英夫設計(推定))。現在は総合人間学部が使用している。(6-135)

京都帝国大学創設期



医学部解剖学教室講堂
(1902年竣工、山本治兵衛設計)。(6-136)



旧石油化学教室本館
(1898年竣工、1909・14・22年増築、山本治兵衛設計)。現在は学生部等が使用している。(6-138)



医学部解剖学教室組織実習室
(1901年竣工、山本治兵衛設計)。(6-139)



医学部図書館書庫
(1901年竣工、山本治兵衛設計)。(6-140)



工学部電気工学教室本館玄関部(1900年竣工、山本治兵衛設計)。(6-137)

(註1) 紹介している建築物の名称は、原則として「京都大学建築八十年のあゆみ—京都大学歴史的建造物調査報告」によった。

京都帝国大学創設期



文学部陳列館(1914年竣工、山本治兵衛・永瀬狂三設計)。(6-141)



文学部陳列館内部。(6-142)



旧附属図書館事務室(1918年竣工、山本治兵衛・永瀬狂三設計)。現在は教育学部が使用している。(6-143)

キャンパス拡充期



学生集会所(1911年竣工、山本治兵衛・永瀬狂三設計)。(6-144)

キャンパス拡充期



旧医学部脳神経研究施設(1914年竣工、山本治兵衛・永瀬狂三設計)。現在は国際交流セミナー室となっている。(6-145)



旧物理学教室放射学及放射学研究室(1916年竣工、山本治兵衛・永瀬狂三設計)。現在は防災研究所が使用している。(6-146)



工学部土木工学教室本館
(1917年竣工、1924年増築、永瀬狂三設計)。(6-147)



工学部土木工学教室本館内部。(6-148)

キャンパス拡充期



工学部建築学教室本館(1922年竣工、武田五一設計)。(6-149)



工学部建築学教室本館内部。(6-150)



旧理学部地球物理学教室(1923年竣工、永瀬狂三設計)。現在は施設部等が使用している。(6-151)



旧施設部電気掛事務室
(1925年竣工、武田五一・永瀬狂三設計)。(6-152)



本部本館(1925年竣工、武田五一・永瀬狂三・坂静雄設計)。(6-153)



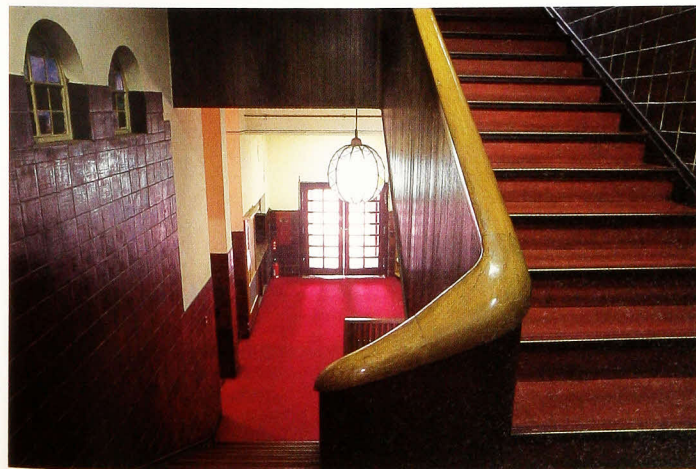
農学部正門および門衛所(1924年竣工、森田慶一設計)。(6-154)



楽友会館(1925年竣工、森田慶一設計)。(6-155)



楽友会館内部。(6-156)



楽友会館内部。(6-157)



楽友会館内部。(6-158)

本部北門門衛所 (1929年竣工、武田五一・大倉三郎設計)。(6-159)



旧農学部附属演習林事務室 (1931年竣工、大倉三郎・関原猛夫設計)。(6-160)

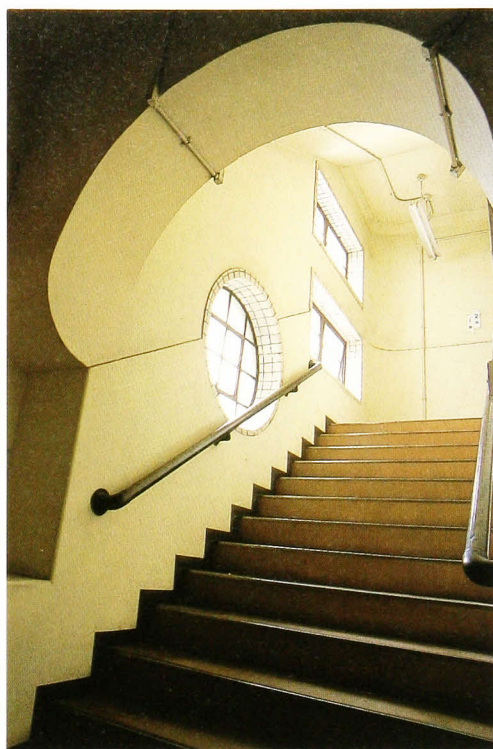


旧施設部電話拡張交換室 (1925年竣工、1931・36年増築、武田五一・永瀬狂三・大倉三郎・内藤資忠設計)。現在は保健管理センターが使用している。(6-161)

旧医学部附属病院産婦人科病舎内部。(6-162)



旧医学部附属病院産婦人科病舎内部。(6-163)



旧医学部附属病院産婦人科病舎(1931年、大倉三郎設計)。(6-164)



法学部経済学部本館(1933年竣工、1938・52年増築、大倉三郎・内藤資忠設計)。(6-165)



西部講堂(1937年竣工、大倉三郎設計)。(6-166)

他施設からの転用建築物



旧京都織物会社本館(1889年竣工)。現在は東南アジア研究センターが使用している。(6-167)



尊攘堂(1903年竣工)。(6-168)



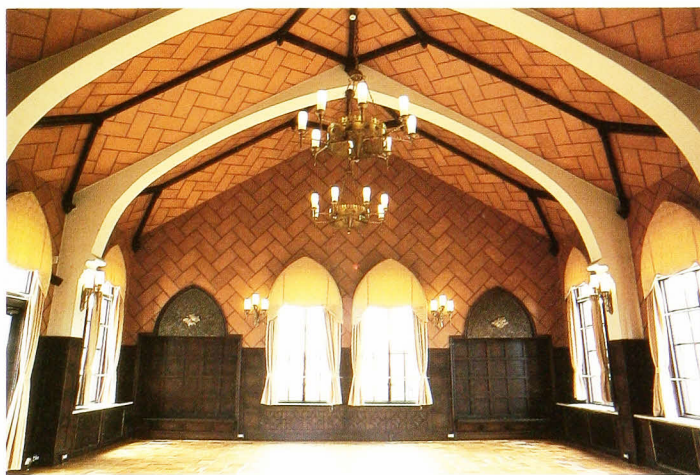
清風荘(1914年竣工)。(6-169)

旧東方文化学院京都研究所 (1930年竣工、武田五一・東畑謙三設計)。現在は人文科学研究所附属東洋学文献センターとなっている。(6-170)



旧東方文化学院京都研究所中庭。(6-171)

旧東方文化学院京都研究所内部。(6-172)



旧東方文化学院京都研究所内部。(6-173)



旧東方文化学院京都研究所内部。(6-174)

胸像・石碑



木下広次(元総長)像(1912年設置)。本部構内時計台南西側。(6-175)



久原躬弦(みつる)(元総長)像(1922年設置)。北部構内化学科生物物理学科棟中庭。(6-176)



鈴木文太郎(元医学部教授)像(1922年設置)。医学部構内解剖講義室南側。(6-177)



織田萬(元法学部教授)像(1938年設置)。本部構内法経北館西側。(6-178)



折田彦市(元第三高等学校校長)像(1940年設置)。総合人間学部構内A号館正面。(6-179)



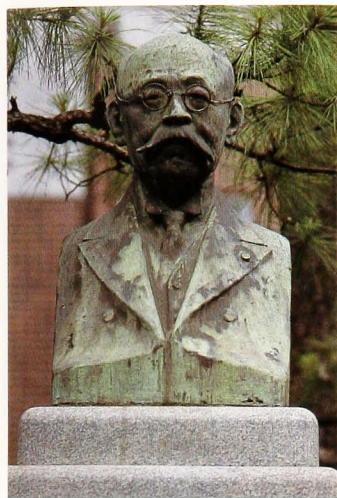
戸田正三(元医学部教授)像(1956年設置)。医学部構内衛生学本館南側。(6-180)



「福井謙一先生ノーベル化学賞受賞記念」碑(1981年設置)。本部構内工学部9号館正面。(6-181)



第三高等学校本科予科解散記念碑(1894年設置)。三高が帝大への進学課程を一時廃止した時に置かれた。詳しくは第1章参照。本部構内正門東側。(6-182)



荒木寅三郎(元総長)像(1930年設置)。本部構内時計台南東側。(6-183)



新城新蔵(元総長)像(1933年設置)。本部構内時計台南東側。(6-184)



湯川秀樹(元基礎物理学研究所長)像(1987年設置)。北部構内基礎物理学研究所正面。(6-187)



ヒポクラテスの木についての記念碑(1983年設置)。医の倫理への医学部の姿勢を示す。医学部構内1号館東側。(6-189)



「理工科大学」碑。設置年代は不明。創立当初に門標などに使用していたものか。本部構内工学部土木工学科教室中庭。(6-185)



「同帰会記念」碑(1914年設置)。同帰会とは1907年設立の理工科大学の学生組織。本部構内工学部8号館北側。(6-186)



実験動物供養之碑(1972年設置)。医学部構内1号館西側。(6-188)



徳富淇水(きすい)寄贈樹木の由来についての石碑(1923年設置)。京大創立当初、初代木下総長と同郷の熊本出身の淇水が現在本部構内時計台西側の楠の苗木を寄贈したとある。石碑は淇水の息子徳富蘇峰が設置した。(6-190)

空から見た構内

© 1991 ~



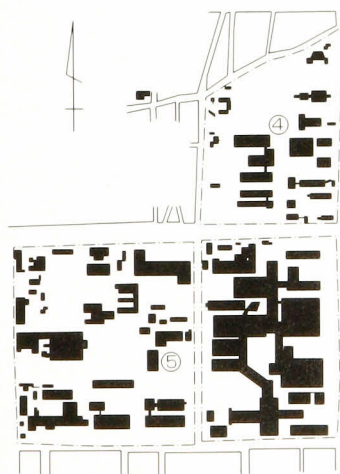
本部構内・北部構内・西部構内・総合人間学部構内の航空写真(1997年5月撮影)。右に見えるのは吉田山。(6-191)



- ① 本部・西部構内
- ② 北部構内
- ③ 総合人間学部構内



医学部構内・病院構内の航空写真(1997年5月撮影)。左に見えるのは鴨川。(6-192)



- ④ 医学部構内
- ⑤ 病院構内



宇治構内の航空写真(1997年5月撮影)。左奥に見えるのは宇治川。(6-193)

